教職大学院 Newsletter No.113

福井大学大学院　福井大学･奈良女子大学･岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科　since2008.4　2018.8.16

夏の集中講座のなかで

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

Newsletter 編集委員会

例年にない猛暑といわれるなか、2018 年度の夏の集中講座がスタートしています。「夏、すなわち集中講座」と形容できるほど、福井大学連合教職大学院にとって、非常に大切な期間となります。それは我々スタッフにおいても同じです。院生のみなさんと共に Cycle1、2、3 の学習を積み重ねながら、自分なりの問いを立ち上げ、その問いに向き合っています。

私たちスタッフも院生のメンバーのみなさんと同じく、世代や専門、経験年数、そしてここ数年では国籍も含め実に多様です。そのため、一人一人その夏のチャレンジが異なります。また、もしかしたらみなさんからは見えにくいかもしれませんが、我々も同じように悪戦苦闘しています。自分の物差しをより長く幅の広いものにしていくこと、自分の実践を支えるコミュニティの存在やその大切さに気づくこと、さらにはそのコミュニティの発展の要件を事例をもとに考え抜いていくこと、そして自分の実践を自分の言葉で跡づけふり返っていくこと。どれも決して簡単なことではなく、時間がかかることです。だからこそ夏に集中的に取り組む価値があるのですが、仮に時間が確保できたからといって一人でそれができる訳ではありません。我々がそれらのことに取り組み前に進むことができるのは、他ならぬ院生のみなさんがそのことに懸命に取り組んでいらっしゃるからです。

協働探究者として我々スタッフが夏の集中講座でいつも思うのは「もっと成長したい」ということ。しかしながら、自分の歩みが遅々としたものであったり、これまでの経験のなかで形作られてきた自身の（なかなかに強固な）フレームの転換が思っていた以上に難しかったりと、時に歯がゆく挫折のような感覚を味わうこともしばしばです。それでもおととしよりは去年、去年よりは今年の方がより良く考えられる自分になっていること（それはすなわち院生のみなさんの報告をより良く聴ける自分になっていることでもあります）に気づきます。その意味で、夏の集中講座はもがきのなかに喜びを感じる期間でもあります。

その夏の集中講座も、すでに Cycle3 に突入しています。本号（Newslette 113 号）は本来なら 7 月の合同カンファレンスのタイミングで発行する予定のものでしたが、こちらの都合でこの時期の発行となりましたことをお詫び申し上げます。特に、原稿をお寄せくださったみなさんには深くお詫びいたします。

内容

巻頭言　(1)
スタッフ　自己紹介　(2)
院生 自己紹介　(4)
インターンシップ/木曜カンファレンス報告　(14)
5 月合同カンファレンス報告　(17)
研究集会・公開研究会報告　(20)
平成３０年度 教員免許状更新講習　(26)
福井大学連合教職大学院夏期説明会案内（28)

スタッフ　自己紹介

西村　拓生　にしむら　たくお

この春に新たに立ち上がった連合教職大学院に奈良から参加させていただいています。

奈良女子大学が連合に参加したのには（後述するような）相応の理由があったのですが、それとは別に、個人的には不思議なご縁で——思いがけなく、しかし必然的に——福井に「戻ってきた」と感じています。その訳を書こうとすると、ほとんど半生を語るような感じになってしまうのですが…。生まれ育ったのは信州。両親とも教師でした。私が現在このような仕事をしているのは、自分自身が子ども時代に「信州教育」の風土の中で、先生方や学校文化との幸せな出会いによって育てていただいたからだ、と今にして思います。そして高校時代、世の中を変えることができるのは教育だと、如何にも高校生らしく思い定めて教育研究者を目指しましたが、教育学という学問に少し幻滅して、教育思想史・教育哲学へと「迂回」。研究テーマは今日に至るまで、美的教育論の思想史研究、とりわけドイツの詩人シラーの『人間の美的教育に関する一連の書簡』という古典の解釈史研究です。（教職大学院では少し毛色の変わったタイプかもしれません。）

京都での学生生活、助手勤めの後、最初に赴任したのが福井の仁愛女子短期大学でした。幼児教育学科で保育士、幼稚園教諭を目指す学生さんたちと学んだのが自分の大学教員としての原点です。実習訪問で県内各地を回ったのも懐かしい記憶です。先日、ラウンドテーブルで福井の現職の先生方とお話しをしていて、はたと思い至ったのは、福井大学の教職大学院のスタイルは、他ならぬ福井の風土と人情に根ざしてこそ育ったものではないか、ということでした。うまく言えないのですが、おおらかで素朴に人懐こい（と私には思われた）福井の風土と人情を、福井時代に結婚して子どもも授かった経験を通して、私は確かに感じていました。そこに、共に育ち合う探求のコミュニティを容易にする土壌があるのではないか、と。

その後、富山県立大学の勤務を経て奈良女子大学に移ってから、そろそろ 20 年になります。文学部にある教育学の講座なので、これからはブンガクブらしく地道な思想史学者として生きて行こう、などと思って赴任したのですが、思惑違いでした。2001 年に文部科学省の「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会」が、奈良女子大学のような非教員養成系の一般大学は原則として廃止する、という方針を出しました。大正自由教育以来の伝統を今日まで保持している希有な学校をむざむざ潰すわけにはいきません。そこで、大学が附属学校を必要とする担保として、全学の附属に改組しつつ、附属を活用して教育研究を行う研究センターを立ち上げる仕事を、私は中心的に担うことになりました。自分も率先して附属をフィールドとする研究をしなければならない、となって、授業研究の真似事などしてみたものの、どうもしっくりきません。

そこで思い当たったのが、京大での助手時代に恩師の和田修二先生や皇紀夫先生が新しい専攻を立ち上げるのを見ていた「臨床教育学」——ただし、いわゆる解釈学的な——の方法論でした。キーワードは「物語り（ナラティブ）」。教育の「現実」は、教師が自らの実践を「物語る」「語り直す」ことによって構成される、という考え方に基づき、附属の先生方と共に授業研究を試みました。（詳しくは拙著『教育哲学の現場——物語りの此岸から』（東京大学出版会、2013 年）をご参照いただければ…。）それ以来、「臨床教育学」というのが私の二足目のわらじになりました。

附属の先生方と協働しつつ、あらためて現在の学校教育や教員養成の状況を見渡し、自分たちのあり方を自省してみると、奈良女の附属には従来とは違ったミッションがあるようにも思われました。今日では、教育実習をして教員免許を取って就職しても、直ちに「教師になれる」わけではありません。実践の中で、様々な子どもたちの姿に即して、同僚と共に自己省察を重ねながら、常に「教師になりつつある」過程を生きることが、現在の教師には求められています。それは奈良女の附属でも同様です。SSH や「奈良の学習法」といった「先進的な実践」も、それを担う教師の存在と切り離し得ない以上、パッケージ化したモデルとして差し出せるものなど表層的

なものに過ぎないのではないか。そんな疑問をいだいていました。

そんな時に福井大学からコラボレーションの呼びかけをいただきました。福井の教職大学院のスタイルは、学校現場の実践から離れたところで一方的に教え・学ぶのではなく、現場で教師が「教師になりつつある」過程に丁寧に寄り添い、共に実践を語り、実践から学ぶ場を育てる試みである、と理解しました。今、求められているのはまさにこれではないか、と思いました。自分が試みていた臨床教育学の立場からも、それはとても納得のいくものでした。そこで私たちの附属は、最初に中等教育学校、次いで小学校と幼稚園が拠点校となり、福井大学との連携を契機に、教師が「教師になりつつある」過程をサポートする教員研修学校となることを目指して学校づくりを進めてきました。そしてこの春、大学そのものが福井大学、岐阜聖徳学園大学と連合を組んで、この取り組みをさらに展開することになった次第です。

昨年、「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」の報告が出され、「在り方懇」の危機が、いっそう深刻なかたちで奈良女子大学と附属に再来しています。連合教職大学院への参加は、女子高等師範学校の遺伝子をもつ奈良女の、教職課程と附属の「生き残り」をかけた戦略ではあります。しかしそれ以上に、日本の学校教育と教師教育に私たちの大学と附属は如何に寄与できるのかを考え、前進するための拠り所です。そして私自身にとっては、かつて駆け出しの研究者を育ててくれた福井の地への回帰であると同時に、教育研究者を目指した初志への回帰のように思われるのです。――福井に「戻ってきた」のは、思いがけなく、しかし必然的であった、と。

塩川　史　しおかわ　ふみ

今年も例にもれず年度始めから走りっぱなしで、気がつくと１学期が終わろうとしています。拠点校の奈良女子大学附属中等教育学校の教員ですが、今年度から発足した連合教職大学院のスタッフとしても仕事をさせていただくことになりました。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

教職大学院修学時から福井通いが始まり、奈良を離れて暮らしたことがない私にとって、福井は今や懐かしささえ覚える特別な場所になっています。その福井で刺激的な先生方や院生の皆さんと出会い、これまでいろいろな学びがありました。何歳になっても学べるものなのだということに驚き、「めぐりあわせ」の不思議をありがたく思っています。

私は、奈良県内の公立中学、県立高校を経て、母校である中等教育学校で英語を教えています。そのため、中高６年という長いスパンで生徒の成長につきあってきたという幸運な教師です。現在担当している３年生も、中学受験という試練等によるストレスのリハビリを終え、やっと「うちの子」になりつつあります。加えて卒業後も関係が切れない生徒も多く、彼らを見ていると（自分自身もそうなのですが）、変わらない人はいない、したがって、教師として生徒に対してする判断は「絶対」ではないということを学んだように思います。すべての生徒が変わる可能性を持っていると信じられることは、教師として大きな安心です。さらに言えば、その生徒たちの成長は色々な人との出会いに支えられているものであり、実は、教師にできることはそれほど多くないのです。それに気づいたとき、教師としての万能感に支えられていた自信はなくなりましたが、気負いがとれて楽になりました。この混沌とした時代にあっては、ただ信頼に足る大人として、また、教師であることを楽しんでいる大人として伴走し、生徒が「大人になってもいいかな」、と思えればそれで十分なのではないかと考えるようになりました。ただ、そのためには教師として楽しく学び続けていることが必要なのです。・・とすれば、教師になった時から、先輩教員を見ていつかは彼（女）らのような、落ち着いた「ベテラン」になろうと頑張ってきたにも関わらず、次々と課題が降ってくる毎日にあっては、常に「足りない感じ」があり、キャリア

を積んだはずの今もなお、みっともなく走り続けている、という現状は、なかなか良いことなのかもしれません。完成形があるというのは幻想だし、当てはめるべきモデルはなく、自分のオリジナルでいかなければならない、いってよい、という、苦しく、楽しいのが教師という仕事なのでしょう。

さて、教職大学院修学時には、奈良女子大学附属中等教育学校の将来構想を練る目的で、学校文化について考えました。「自主」「自由」「自立」の伝統を語った、ある種の責任放棄・放任があり、また、国立大学附属としての存続をかけた様々な取り組みは、”doing”を重視する「強さ」の文化であったように思います。今、必要なのは、新たな学校文化 —— “being”を大切にし、お互いにケアしあえる学校文化ではないでしょうか。授業だけでなく、学校での活動の総体で、どう「ある」べきかを考えるということです。情報や知識だけではなく、（勇気を持って）他者と価値観を交換しあう場が必要です。授業の改革を通じて、生徒の伸びやかな学びを保証し、生徒も教師も「足りなさ」を認識し、「弱さ」を隠さずに聴き合い、学び合うことで繋がってゆけるような、授業・学校を作っていくことでしょう。

４月以降、教職専門性開発コースの院生の長期インターンシップを受け入れたことは、学校を構成する新たなメンバーが加わったことになり、学びの文化を作る原動力になりつつあります。院生が単なる観察者として授業に入るだけでは、学びの空間の「異物」でしかないのでしょうが、物語を作るための課題を持つアクティブな学び手として教室に入れば、生徒の学びをも促進すると信じています。観察される身としては、授業そのものの本質は、院生がいることによって変わりはしませんが、what と how を自覚し、より明確な形にしようとするようになりました。

授業観察、木曜カンファレンス、月間カンファレンス（隔月で奈良女子大学にて実施）を通じた学びは、院生にとどまらず担当する教員の学びとなっており、また新任も含む、本校の教員に拡張しています。院生は授業を観察した教員にインタビューし、院生の授業実習には英語科や学年の教員が参加しコメントを寄せます。授業についての省察の機会が増え、教員同士の対話が増えました。カンファレンスでは、院生の問いかけから私の学びが始まります。自分の中に散らばっている小さな「答え」をつなぎ合わせて、なんとか言葉にするとき、何某かの物語が紡がれていきます。それは、頭を悩ます大変な作業ですが非常に心地よい時間です。そして、自分の英語授業でも、よい「問い」を投げかけ、このような学びが成立するようにしなければならないとつくづく思うのです。同時に、院生自身が観察から得た小さなピースをつないで自分なりの物語を作っていく作業を、どのように facilitate すればよいのか、新米メンターは頭を悩ます毎日です。

月間カンファレンス、集中講座で皆さんのお話を聴き、学びたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

院生　自己紹介

野路　尚美　　のじ　なおみ

昨年度、夏期集中講座や冬期集中講座等で事前履修をさせていただき、今年度よりミドルリーダー養成コースに入学しました野路尚美です。よろしくお願いします。

私は現在、福井大学教育学部附属幼稚園に勤務して４年目になります。昨年度までの３年間は５歳児（年長児）の学級担任として、今年度からは、４歳児（年中児）の学級担任と研究主任をさせていただいています。附属幼稚園に異動する前は、主に福井市内の中学校に１６年間勤めてきました。主に音楽

科の教科指導、学級指導、部活動（吹奏楽、合唱）の指導をしてきました。中学校では生徒に指導をするという教師の上から目線での関わりが多かったと感じています。

幼稚園教諭となって､関わり合う対象が中学生から幼児に変わると、そのギャップに戸惑うことばかりでした。まず、幼児たちに話をするときにどのような口調や速さで話したらよいのか、果たして私の話していることは理解できているのだろうかと不安になりながらのスタートでした。しかし、本園の保育室はオープンスペースになっており、同学年の隣のクラスの様子や担任の先生の話が筒抜けに聞こえてくるので、困ったら隣の様子を覗いながらクラスの幼児たちに接することができました。そのおかげで少しずつではありましたが、幼稚園教諭としての立ち居振る舞いというのも分かってきました。幼児の目線に合わせて膝を折って話すこと、幼児のつぶやきや話している内容に耳を傾け幼児の思いを聞き入れること、幼児の「やってみたい」気持ちが持続するように、遊ぶのに適切な環境を準備したり援助をしたりすること、いざこざが起きたときはすぐに教師が止めに入らずに見守り、互いの幼児の言い分をよく聞いて仲裁に入ることなどがその例です。幼児期に育てたい様々な力の基礎を本園の教育活動全体で培えるように日々の保育研究にも力を入れて取り組んでいます。

本園の教育活動の中には｢好きな遊びの時間｣と｢みんなの時間」があります。幼児の興味関心から始まる「好きな遊びの時間」、そして「好きな遊びの時間」に発見したことや感じたことなど湧き出る思いをみんなで共有し、明日以降の遊びにつなげていく「みんなの時間」の二つのサイクルが積み重なって遊びが充実し発展していくようにしています。幼児たちの心のエンジンとなる「やってみたい」という思いを教師が見取ったり、その思いを継続、発展しながら「できた」という達成感につないでいったりすることで、幼児の学びが深まっていくのではないかと考えています。今年度から、新しい研究主題に変わり、４月からどのように研究を進めていったらよいか、研究主題の内容について同じ研究部の先生方と頭を寄せ合って悩みながらも研究をスタートさせました。６月には、本園の公開保育で、新しい研究主題についての研究概要を発表させていただいたところです。多数の参観者の皆様に保育を参観していただき、本園の研究についてご助言をいただくことができました。これを糧にしてこれからの研究の方向性を見いだしながら、前へ進めていきたいと思います。

私が教職大学院で学ぶ機会をいただけたのは本当に幸運でした。同じ職場の先生や家族が背中を押してくれたからこそ学べているのだと感じています。初めて大学院に足を踏み入れた一年前の夏期集中講座からもう一年が過ぎようとしています。これまで幾度も積み重ねてきた異校種の先生方とテーブルを囲んでの語り合いは、自分の経験や考えを聞いていただける、そして他の先生がたの様々な経験やお考えを聞かせていただけるというとても充実していて、貴重な体験になっています。カンファレンスが終わるといつも「今日も来てよかった。」と充実感を得ている自分がいます。ここでの学びを明日からの自分の力に変えることはもちろん、これからの園での教育活動、研究活動の推進力にしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

色水遊び

「どんな色ができるかな。」

制作遊び

「丈夫なトンネルにしたい。」

好きな遊びの時間　砂遊び

「温泉をつくろう」

みんなの時間

手遊びと遊びの振り返り

公開保育の様子

田原　裕　　たはら　ゆう

今年度より２年間、教職大学院で学ばせていただきます。よろしくお願いいたします。前任の公立中学校での４年間の勤務を経て、現在は福井大学教育学部附属義務教育学校（以下、福大附属）後期課程で勤めることとなり、２年が経ちました。福大附属での勤務は、４年間の勤務を経て少し落ち着こうとしていた自分を慢心させずに、もう一度新たな気持ちでやることを後押ししてくれるものでした。福大附属では、前任校で自分自身が積み上げてきたもの、培ってきたものを生かしながらも、再度とらえ直し再構築する必要がありました。授業づくり、生徒指導、教師としての役割等、学校での職務全てにおいて、今でも尚、初任者のような気持ちをもちながら毎日を過ごしています。

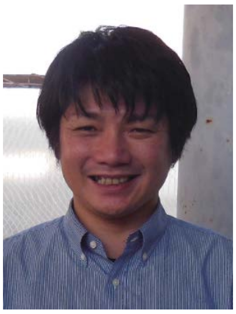
とりわけ授業においては、かなり悩んでいます。前任校では、受け継がれてきた各単元のやり方を習いながら、体育科教員同士で足並みをそろえて授業を行ってきました。初任者の私でも、二人の先輩体育科教員のご指導のもと授業を行っていれば、授業ができてしまう状態でした。そのため、自分自身で構想・構築して行った実践した授業実践は少なく、やりっぱなしのものも多かったため、自分自身で手応えを感じながら授業を行ったことは少なかったと振り返っています。福大附属では、子どもたちの授業に対する感覚が前任校の子たちとは全く違い、これまでの授業を変化させる必要がありました。プロジェクト型（山登り型）、協働探究、自律的な学び、子どもたちによる主題設定、９カ年で培いたい資質・能力等々。福大附属に来てから初めて聞くワードばかりで、そういった用語の理解ですら、２年経ってもまだまだ不十分な段階です。ですが、福大附属では互いに授業を見合い、先輩教諭をはじめとする他教諭と授業について語り合い、そこから自分自身の実践を振り返りながら頑張っていけるコミュニティとしての心地よさがあります。赴任当初は不満を漏らすことも多かった私は、今は授業実践に前向きにチャレンジすることができるようになりました。

これまでは自分自身の授業実践や目の前の子どもたちとの関係づくりや生徒指導にしか目を向けてこず、いつも支えてもらい指導いただいていただけでした。しかし今年度は、本校の研究企画メンバーに所属させていただき、学校の研究を中心的な立場となって創り上げていく機会をいただいています。私自身が他教諭と積極的に情報共有や意見交換をはかっていきながら、コミュニティの歯車を回していくことが務めだと認識しています。今年度がスタートして３ヶ月が経ちましたが、当然やりきれるわけもなく、当たり前のように周囲の先生方のお力をいただきながらやっている状態です。ですが、教職大学院での学びが、今後の自分の力になると考えています。

さて、福井大学教職大学院では、自分がやろうとしていること、自分たちがやろうとしていることを自分の言葉で語る場面がたくさん用意されています。また、様々な職種・年齢・職場で勤めていらっしゃる、多様な特徴をお持ちの方々の話を聞きながら、意見を交わし、自身の実践をとらえ直し、再構築したり、価値を認識したりする機会が用意されています。今、学校をちょっとだけ中心的な立場で回していこうとする私に不足している、「多様な情報」「省察と振り返り」「思考していることの理論化」が培っていけると感じています。

これからあるたくさんのカンファレンスがとっても楽しみです。どうぞよろしくお願いいたします。

坂部　宏明　　さかべ　ひろあき



今年度より、ミドルリーダー養成コースに入学いたしました坂部宏明です。どうぞよろしくお願いいたします。

①これまでの歩み

平成１３年に福井大学教育学部中学校教員養成課程を卒業後、2 年間中学校講師勤務を経て、越前町立朝日小学校に初任校として８年間勤務しました。赴任当初、常に児童のそばにいて、一緒に学んだり遊んだりして、若さとノリで何とか学級経営をしていた姿が思い出されます。私が教職という仕事に対する意識が変わったターニングポイントとして、赴任４年目の時に出会った先輩教員の言葉がとても大きいと思います。その言葉とは、「子どもが１日の中で最も長い時間を過ごすのは何よりも授業で学習し

ている時間である。授業で子どもたちの人間性が育てられる。分かる・できる授業ができれば学級経営はうまくいく。」というものでした。その言葉を受け止め、なるほどと理解したときから、私の授業に対する意識が大きく変わり、授業で子どもの心を育てていくという感覚が養われたと自覚しています。

二校目の福井市明倫中学校の６年間の勤務では、前任校で学んできたことを引き続き活かしながら、分かる・できる授業づくりを意識して自分の授業力向上を目指していきました。また、それだけでなく、学校全体に関わるミドルリーダーとしての役割を模索し、よりよい学校となるように働きかけをしていきました。その中で、同僚のそれぞれの思いを活かしつつも職場全体の職員を巻き込みながら学校運営を進めていくことの重要性を実感することのできる６年間だったように思います。

現在勤務している福井大学教育学部附属義務教育学校では、研究企画（研究部）に所属して、学校全体の研究組織の中心となって学校全体の研究が盛り上がるように働きかけをしています。本校は、「主題－探究－表現」型の授業づくりを中心に研究が進められていて、総合的な学習の時間の「学年プロジェクト」を柱にして、各教科との関わりや互恵関係について探究しています。また、プロジェクト型学習（PBL）はこれまで本校が実践しようとしてきた授業スタイルであり、２１世紀における資質・能力（コンピテンシー）を養うために効果的であると注目されています。さらに、探究するコミュニティに関する実践を長きにわたって研究が続けられており、研究企画のメンバーである自分にとって「実践コミュニティ」づくりに関する理論を活かしやすいと考えています。

②教職大学院で深めていきたいこと

これまでの歩みを踏まえて、この教職大学院では、以下のことについて深めていきたいと考えています。

○研究企画として学校全体の研究組織の在り方や効果的な組織編成について追究し、全教師がわくわくするような研究理念を伝えたり体制づくりをしたりする。（探究するコミュニティづくり）

○実践コミュニティについて理解を深め、授業実践にも活用できるようにする。（教科における授業実践力）

○子ども一人ひとりの学びを見取り、それぞれの学びの変容につなげることができる教師力をつけていく。（子どもを見取る力）

以上のことを柱にして、経験だけでなく理論に裏打ちされた実践を進めていくために学び深めていきたいと思っています。また、合同カンファレンスなどの様々な方々との語り合いをすることで、より広い視野を獲得して子どもにとって広がりのある学習活動を設定することや運営面についてリーダーが関与できるように仕掛けていきたいと考えています。

小嵐　英輔　　　こあらし　えいすけ

はじめまして。今年度、ミドルリーダー養成コースで学ばさせていただいています。附属特別支援学校４年目になり、この教職大学院に行きたいと決意した理由は単純なもので「勉強しないといけないな」とこれまでの自身の実践を振り返り感じていたからです。本校の研究会はもちろん、中堅教諭の立場として様々な場で教育について話し合ったり、実際に取り組んだりする中で、「違和感」を感じることがありました。しかし、それは一体何なのか分からなかったり、うまく表現できなかったりすることが多々ありました。その「違和感」から目を逸らそうとすることもありました。ただ、それが気持ち悪く「なんとかしないと」と考えはじめていましたし、身近に教職大学院に行かれている先生方が多くいらっしゃったこともあって、この教職大学院入学の話があった時に、手を挙げていました。

私が教員を目指そうと思った理由は「子どもが大好きだから」といった理由ではなく、教員をしている家族がおり、小さい頃から熱心に仕事している姿を見て「何がそうさせるのか」と興味を抱いていたからです。講師経験を含め、今では教職に就いてから１１年目になりました。様々な校種に赴任させていただきました。異動する度に違う校種になり、毎回不安でしたが、とても貴重な経験ができたよう

に思います。滋賀県立盲学校では、全盲児と一緒に活動しました。「山って何？」「明るいって何？」「赤色ってどんな色？」など、感覚的なことを伝える難しさを覚えています。触ることを大切にした体験的な学習は教師である私もとても楽しく、子どもと共に一喜一憂していました。敦賀市立松原小学校では３年生と６年生の担任をさせていただき、子どもたちと一緒に作り上げる楽しさや難しさをたくさん経験させていただきました。辛く大変な時もありましたが、子どもたちが卒業していく日や異動が決まり離任する日は思い切り泣きました。前任校では、毎日新しいことに出会い、その必死さから、余裕が無い生活を送っていたように思います。現任校である附属特別支援学校でも同様で、余裕があるとは言えませんが、幸いにも、子どもに対する支援の仕方や授業づくりに関して研究できる日々を送ることができ、充実しています。

プライベートでは、３人の娘に恵まれ、仕事から帰ると保育園の話を聞いたり遊んだりしています。休日には、どこかの公園に行くなど家族で出掛けることが多いです。娘に強く接して後悔してしまうことも多々ありますが、「もうこんなことができるようになったんだ」と子どもの成長の早さに驚かされます。

仕事と家庭で子どもと接していく中でよく感じることは、「子どもの成長って面白い」ということです。あっという間に成長していく娘たち、ゆっくりと成長していく学校の子どもたち…速度が違うけれど、その成長に関われることの貴重さとそれに伴う責任を感じています。子ども一人一人の成長を、その子に応じてしっかりと支えていくことができるよう、この教職大学院では様々な先生方と語り合い学んでいくことで、教師としての力量を高めたいと思っています。よろしくお願いします。

前田　健志　　まえだ　たけし

4月より入学しました前田健志と申します。生まれてから学生生活まで過ごした京都を離れて、香川県の私立で教員生活をスタートさせて早 13 年が経ちました。金沢ももう９年目、徐々に雪国に慣れてきましたが、さすがに去年の雪は衝撃でした。つまらない話はさておき、少し自分の教員生活を振り返る形で、自己紹介をさせていただければと思います。

学生時代、押し付けられる画一的な従来型の勉強・授業が大嫌いだった筆者。この経験から、教壇に立つ時には「自分が受けたい」「お金を払ってでも受けたい」「これから生きていくうえで役に立つ」をモットーに生徒に接してきました。そのため、「なぜ？」「どうしたらいいか？」などの問、身近な問から入るのは自然な流れだったと今振り返ると思います。今でいう「アクティブラーニング」ですね。このことは授業だけでなく、担任、部活、生徒指導、すべてに通じることだと思います。

もともとは日本史が主の担当（中学校社会・高校地歴公民のすべての科目を受け持ったが）だったのですが、今の職場に来てからは公民を主に担当しています。その中で、「メディア・リテラシー」や「主権者教育」に関する実践を積み重ねてきました。ここ５年間くらいは、セクショナリズムの弊害を打破しようと「教科・科目横断」などの研究にも力を入れてきました。もともと勉強嫌いな私にとっては、教科・科目を分けることより、様々なものがつながっているほうが楽しく感じられたので、力をいれてきたのだと振り返ってみて思います。

また、附属高校に赴任して３年目にスーパーグローバルハイスクールの申請に大きく関わり、SGH のプログラムを作成・実践していく中で、「高大連携」も自分の仕事の大きなテーマとなり、「効率的・効果的な理想的な高大連携」という研究が研究指定を受け、学長から研究費をいただいています（GP 研究）。その流れで、金沢大学の教員養成の講座も受け持つようになり、次第に「教員養成」にのめりこんでいきました。同じ志や、理想的な教育をともに目指している仲間を増やしていくことに、残りの教員人生をかけてみたいなと今は考えています。

福井の教職大学院に行こうと思ったのも、教員養成にもっと携わっていき、同志を増やしていきたいと思ったからです。福井に通うようになり早３か月がたちましたが、毎回本当に充実した学びがあります。実践報告やカンファレンスを通じての学びあいは、他ではなかなか味わえません。何より皆様のモチベーションの高さは、もっと自分も頑張ろうという気持ちにさせてくれる大事な栄養剤です。本当に助かっています。

また、教職大学院にこなかったら、こんなにも自分の学びを振り返ることもなかったと思います。自分の今までしてきたことの振り返り、意味づけ、そしてつなげていく大切さを毎回痛感しています。これからも皆様と共に充実した学びあいをしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

辻崎　千尋　　つじさき　ちひろ

本年度より、ミドルリーダー養成コースに入学しました。どうぞよろしくお願いいたします。私は、現勤務校で立ち上がった「授業改善プロジェクトチームの継続・拡大」と「現代文の授業における思考力の育成」を研究テーマに教職大学院に進学しました。不安と期待と緊張が入り混じった中で迎えた４月の月間カンファレンス。同じテーブルになった先生方が自己紹介を兼ね、これまでの取り組みやこれからの展望を語られたのを伺い、大きな衝撃を受けました。と同時に、教育現場に存在する問題の多さと解決方法の難しさを思い知らされました。

これからの生徒たちは、「予測困難な社会」を生きることを強いられ、「AI に負けないような資質」を備えるよう言われ、「答えのない問いに対する解決策」を迫られます。それはモデルケースが存在しない人生を歩むことも意味します。では、私は教師として授業を通し生徒たちに何をしてあげられるのだろうかと考えます。少なくとも私自身は伝統的な講義形式の授業を中心に受けてきており（決して伝統的な講義形式の授業を否定するわけではありません）、新しい時代（しかも難題が山積していそうな時代）に向けた教育など、受けてきてはいないのです。

さあ、どうしましょうか。しかしよく考えてみれば、私たちも求められているのです。思考の転換を、実践する勇気を。求められているのならば、やるしかないのです。常に生徒たちより上手（うわて）でいるために、今までより少しだけ視点を変えて、今までより少しだけ工夫を加えながら。しかも何が正しいかなんて誰にもわかりません。それでも、いや、だからこそ試行錯誤しながらあがきながらでも、新しい授業スタイルをデザインしていかなければならないと思うのです。そして、どうせやるなら、できるだけ楽しく、刺激しながらされながら、同じ志をもつ仲間たちとやっていきたいと望みます。それがいつか授業だけではなく、学校全体の諸問題について主体的に話し合い、実践しながら解決策を見つけられるような、そんなチームになったら最高だと思うのです。もちろん、現実はそんなに甘くはありませんし、そんなに簡単に事が運ばないことも十分承知しています。それでも、志はいつも高く掲げていたいものです。生徒に進路指導するとき「目標は高く持て」と言うのと同じように。

５月・６月の月間カンファレンス、そして６月のラウンド・テーブルを通じ、既に知り合っていた先生方と親交を深め、また新しい出会いからつながりが生まれました。どの先生の研究の内容にも、共感できる部分、また、考えさせられる部分があります。そして、自分と同じようなところで悩み、考えておられる先生方のお話を伺いながら、いつのまにか前のめりになって、何度もうなづいている自分がいます。同時に、自分の授業実践を省察する機会を与えられ「よし、明日からの授業、また頑張ろう。」という気持ちをいただいています。まだまだ勉強不足の身、今後とも皆様からたくさんのご指導を賜り、成長できる自分でありたいと願うばかりです。

中嶋　旬子　　なかじま　じゅんこ

今年度より、ミドルリーダー養成コースで学ばせていただくことになりました中嶋旬子です。どうぞよろしくお願いいたします。福井県の私立北陸高等学校にて、英語科教員として勤務しております。北陸高等学校は、1 学年に 4 つのコース（普通・商業・進学・特進）、16～17 の学級があり、３学年で約 1700 名の生徒が通っています。現在、1 年生の特別進学コースの担任をしております。正解のない人生を主体的に考え、歩んでいけるような生徒を育てていきたいと考えています。教科担当としては、知識の習得はも

ちろん、様々な視点から物事を考え、自分の考えを持てるようになる授業、英語の学習を通し、社会の中での自分を意識することができるようになる授業を心がけています。

今までの自分の実践を振り返ると、試行錯誤を重ねながら、グループ活動やペアワークを取り入れ、自分の目指す授業スタイルを作りあげていったつもりでしたが、主体的・対話的という部分にとらわれすぎて、余裕を持って話し合いの根拠や概念、関連性など、生徒自身が考える授業を展開できていなかったように思います。新テストに向けて、しなければならないことは分かっていても、どのような意味や効果があるのかを実感しきれていませんでした。筆記試験で高得点を挙げる生徒であっても、実践的な英語力を身につけていなかったり、生徒の主体性を引きだせない授業をしていたように思います。

まだ数回ではありますが、合同カンファレンスに参加させていただき、様々な事例や実践を読み、校種や世代の違う先生方と語り合うことで、新たな視点が持てるようになりました。子どもたち中心で実践し、成功しようが失敗しようが、経験であり、完璧を求めすぎてはいけないということも学びました。

自分の考えを持ち、人と対話し協働しながら新しい考えを創造するためには、基本的な知識・技能の定着が必要不可欠です。しかし、知識をただ詰め込むのではなく、学習内容や学習活動を通して知識・技能を習得できるようにしなければならないと考えています。知識や技能を習得しながら思考力を使うためには、学習意欲がわくような環境作りが必要です。課題設定や発問を工夫し、協働的な学びができるような実践でなければならないと

考えます。実践を通じて試行錯誤を経験し、その中で困った点や気づいた点を解消したいという思いを持つこと、生徒の学ぶ力を信じ、日々の実践と教職大学院で学んだことを深めることで身につけ、生徒自らが学び続けることができるような取り組みをしていきたいと考えています。

生徒の希望進路の実現に向け、これからは協働学習スタイルへと転換し、生徒自らが考えを深めることができる発問や展開などの教材研究をし、実践的な英語力と入試に対応できる力を伸ばすことのできるような授業改革を目指していきたいと考えています。

２年間、どうぞよろしくお願いいたします。

Ugyen Dorji

I am Ugyen Dorji. I am from Bhutan. I teach Chemistry and Biology in a high school. I have been teaching since 2010. I am a recipient of MEXT Teacher Training program scholarship and currently pursuing my course under guidance of DPDT at Fukui University. School visits and class observations, associations with teachers and other professionals, seminars and roundtable, readings and reflections, all has been very enriching learning experience and all the insights I have gained are invaluable assets I would be taking back home.

I am from a country where concern and support for education by the government is quite immense. The government provides all within its reach for the professional development of the teachers for the overall benefit of the students. But what I experience here in Japan with DPDT is entirely at different level. In every meeting and seminars, everybody is an important player. As we reflect and share ones' perspectives, what each individual learns is equal to the sum of everybody's learning. As we move ahead with time and with new learning, it provides us with clearer insights to unlearn things obsolete, then refocus and relearn.

I believe in "what a teacher is, is more important than what he teaches". Of course how he teaches is also equally important and it is one main aspect of my training here. Teaching goes way beyond classroom and curriculum and lesson objectives. It is more to do with enriching basic human values. The teacher-student relation must be built on mutual trust, respect and openness. The teacher must embody the subject he teaches. He must exhibit zeal, vibrancy and energy. An interesting lesson is an effective lesson. A keen sense of humor, perseverance, diligence and hard work are few other unheralded qualities that makes the difference between a good and a great lesson. And all this are not something gained through professional development program but one which every teacher must cultivate on their own.

I have always gained more than I could give back in this noble profession. My associations with DPDT would equip me more to make the learning experience for my students more meaningful. I am still a learner and there are still many things I need to learn. I feel fortunate to be placed with the right department for which I will always be grateful to the MEXT and also for the opportunity to experience Japan and be Japanese for 18 months.

Sonaleeca Das

One of the most famous Indian poets and philosophers, Gurudev Rabindranath Tagore has said (In collection of poems Gitanjali),

"Where the mind is without fear and the head is held high,
Where knowledge is free
Where tireless striving stretches its arms towards perfection
Where the clear stream of reason has not lost its way
Into the dreamy desert sand of dead habit,
Into that heaven of freedom my Father let my country awake"

It was way back during late 1990s when I came across this famous poem and it somehow contributed to a conflicting and turbulent mental plane that I was in at that time when I was still a junior high school student.

One of my language teachers explained the need for freedom of thought and expression in the class. I as an adolescent could not understand even a word, although, I found myself floating in imaginations about living in a free world where I could read books of my choice, prepare projects of my interest and solve mathematical problems of my liking, write as many pages possible during literature classes, play to the satisfaction of my heart during evening hours, and most importantly converse with the elders of the society without an ounce of hesitation and fear of reprimand for the words I uttered or the pitch of my voice. This famous poem was explained in few classes and the more the teacher spent time over it, tougher it became for me to comprehend.

This was so because the words and actions did not match in the world I was a part of at that time.

The year ended and we were all promoted to next higher class. I was all the more confused and withdrawn. During that time, teacher introduced (William Shakepseare)

"All the world's a stage,
And all the men and women merely players…….
The whining schoolboy with his satchel
And shining morning face, creeping like snail
Unwillingly to school."

When the teacher was explaining this poem, someone asked "Why unwillingly to school?" The teacher took a clue and elaborated, "Take an example of your class. Some of you might not want to study but to watch TV all day long. Someone might be talking back to parents and elders but your actions are not accepted. They may not understand you. Your opinions are discarded because they might feel that you are too young for developing opinions. And you are rebuked for showing childish behaviour. You are confused. Do not want to be at home and unwillingly to school."

"But why does it happen? Why can't we be accepted?" asked another.

The teacher replied, "You are neither a child nor an adult. You are an adolescent- a passing phase."

"When could we be accepted, then?" another classmate argued.

"When you are grown up and become an adult?" the teacher replied. Then he continued with explanation of the poem. He had perhaps anticipated the next question and hence left the discussion skilfully.

My longing for that stage of acceptance increased. On one hand Tagore was talking about 'where the mind is without fear', Shakespeare talked about our 'roles in the stage of world' and here I was facing the reality where neither I had the freedom not a role to play. I was branded as a passing phase. The years continued with confusion and forceful alignment of thoughts and aspirations with society.

It was during that time that the term aspiration took a hold on me for more than longer, perhaps, I had thought. I was introduced to the term aspiration during family study time one Sunday during my adolescent years when I was provided a book titled 'Essays in Philosophy and Yoga'

written by Sri Aurobindo, one of famous philosophers of twentieth century India. There was an essay on 'The Human Aspiration' and a part of it I quote here,

"The problems of existence are problems of harmony. Discords and disorder of the materials, oppositions, demand a solution by accordance, by the discovery of a harmony."

All of a sudden a turbulent adolescent who had somewhat developed a feeling of 'problems of existence', came across the jargons of aspiration and harmony without any light focussed on them by any of the adults I was surrounded with. I started thinking that I was a part of the world and that I had an existence. My existence was justified by me as a child to my parents, a student in school, a friend to classmates, a well behaved adolescent to neighbours and an aspiring to be successful individual in near future. Still then why was I not in harmony with my own existence? What was the inner turmoil?

There was no assistance to be sought as those years went by as 'self absorbed and lonely', without independence and consequently 'hesitated to form close ties' (Erik Erikson's theory of psycho-social development) in order to share the dilemma. Perhaps a contribution of nuclear family.

This state lingered. I became a teacher (though unwillingly). I started teaching in a day school for twenty two months before working in a residential school. There I started teaching classes VI to X. Before I could know, I had entered into life altering phase of my life.

I was in an adolescent laboratory for twenty four hours a day, seven days a week for nine months in a year. They showed different developmental characteristics. They were happy and aggressive; charming and rebellious; willing to be groomed and but remained shabby at times; demanding love, care and attention but withdrawing; they were clear and confused; wanted to study the whole night before exams but skipped classes on normal days; played to the satisfaction of their heart during evenings but willing to go to field on some other days; they wanted to achieve big in life but would not want to sit for hours learning the lessons; talking of repentance and forgiveness in one breathe; never going to bed without saying night prayers; conscious about physical changes and making fun of each other at the same time.

I was standing in front of a life size mirror. I had been perhaps given a chance to revisit the hidden turmoil of adolescence to face myself and search for the harmony in aspiration so that I could pass the lingering stage of unattended adolescence and could become a mature grown up individual because "an adult technically may not enter adulthood even if they are in their twenties, thirties or older" (Erik Erikson). Then what was missing from life. Which hidden treasure had to be found?

Formation of a 'self identity'? Perhaps yes. It was the self identity that I was searching for. Being in the role of a teacher helped me to identify 'lack of development of self identity' in me. Then I came across the questions like, "Why could not I create a self identity during formative years? What were the hindrances? What could have facilitated? Who could have facilitated? Why could not anybody think of creating an environment for my growth?" These were few questions that also found resonance with many contemporaries in my organisation. We had a common cache, "Had we got the appropriate assistance we could have been at different level of personal and professional development". So what was that proper assistance? What higher levels we could have attained?

The questions were intriguing.

Since then my journey towards understanding 'how do people think, what make them to think, what do they think when they think, why do they think; and how do people know what they should know, when do they know what they know, what could average people do to know what they should know' began.

During this quest, I came across the concept of integral education. Three fundamental principles of integral education advocated by Sri Aurobindo were– "The first is that nothing could be taught; the mind has to be consulted in its own Growth; to work from the near to the far." (Sri Aurobindo Centre for Advanced Research, India).

These fundamental principles were aimed at attaining new divine principle of being and consciousness, the supramental consciousness.

First principle suggests that the proper role of the educator is not to instruct or to impart knowledge to the pupil, but rather to help and guide the student in acquiring knowledge for himself or herself. The educator's role is to suggest and to encourage the pupil in the quest for knowledge, and to assist the learner in finding it. The provision of outside resources and a stimulating and enriching environment is useful in that they may help to awaken the individual to potentialities that are hidden within, while at the same time providing materials and a field of experience with which to manifest these latent possibilities. But the choice of these materials, the

manner and timing in which they are utilized by the learner, must be determined according to nature and rhythm of inner development and awakening of the individual student.

Second principle suggests not to impose knowledge on the pupil, nor to arrange for the student to develop particular qualities, capacities, ideas, or a prearranged career. Each individual has a unique dharma, a particular Divine-given talent and duty, and it is the educator's responsibility to help the student identify these innate interests, predispositions, and abilities and to develop and perfect them.

Third principle suggests that the individual must be guided from what is known, what is accomplished and secure, to further extensions of knowledge and ability that lie within reach but are as yet unrealized or undeveloped.

When these principles are revisited a couple of times, a central idea is reflected. The idea of nurturing consciousness among children- consciousness of body, mind and soul; the local and global; external and internal; self and others.

Although I am not an advocate of this unique system of education which aimed at a transformation of our human existence with its ignorance and suffering into a divine life united inwardly with the Supreme and expressing outwardly that greater, infinite existence in a transformed mind, life and body, yet I could not help but think about it when the buzz is around child centred education.

Teacher should view each child as an integrated personality and support each child’s individual growth. Force-fed education often occurs when teachers rigidly adhere to the course of a curriculum without adapting according to students’ level of growth and when they value and engage with superficial desirable aspects of their students, ignoring the hidden or undesirable ones (page-279, Lesson study in Japan).

Whether Indian, Japanese, European or American thinkers and philosophers, they have all argued about child-centred education. Their arguments also find resonance in the poem that had catalysed my thought processes during formative years, “Where the mind is without fear and head is held high”.

After all these years of introspection and reflection, I feel that some of my questions have been answered through reading of these theories. However, what is the way to initiate, practice and sustain a child centred education (even with minimum resources) is the question that has occupied me. During this search, I have come across the idea of reflective study recently. And reflective study is a part of lesson study that is considered to be carried out in most of the schools in Japan. In my opinion, reflective study reflects a way of finding centrality of idea in whatever work a person (here students, teachers as well as researchers) does and ‘being reflective’ as a practice is nurtured among the students here, I wish to observe the process of reflection among school students. At the same time, I feel that every effort becomes a waste if these efforts are not documented because documentation helps in further reference and research and opens up space for correction and improvement. Therefore, during my stay as a MEXT Teacher Trainee in University of Fukui, Japan, I would also like to learn and acquire an insight into the process of documentation of reflection by student community as well as teaching community. I am looking forward to an active learning session in Department of Professional Development of Teachers (DPDT) of University of Fukui in the days to come.

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

学び続ける

教職専門性開発コース２年/福井市中藤小学校　森本　希美

教職大学院２年目が始まってから、あっという間に２か月が経とうとしている。週３回のインターンシップから週１回にインターンシップが変わり、(２年目になると、課題別実習と呼ぶ。) 残りは学部の授業や教員採用試験の勉強時間に当てている。２年目になって変化したのは、インターンだけではなく毎週木曜日にある木曜カンファレンスという M２が中心となって行う授業の企画・運営が主となってきていることである。

インターンシップでは、昨年までは低学年のクラスに入っていたが、継続してこのクラスをみたいと思う気持ちもあったが、さまざまな教科の授業や専科の先生の授業も学びたいと思い、新しく高学年のクラスに入っている。この学年の学年集会で子どもたちに挨拶をしたとき、きく姿勢がすばらしい印象を受けた。話される先生に合わせて向きを合わせ、７人もの先生の話が終わるまで視線を教師に向け続ける姿をみて、驚きと衝撃を受けたのが出会いだった。２か月が経ち子どもたちは、新しくクラス・担任も変わったが、今まで学び続けた経験と照らし合わせながら、今どうするべきなのかを日々考え徐々に成長していく姿があるように思える。現在、学年全体で取り組まれている総合学習が動き出している。子どもたちが、１つ１つの学習に目的を持って学習する姿、学び成長していく姿を追っていけることが、これからとても楽しみである。

木曜カンファレンスでは、院生の学びの場である木曜カンファレンスを企画・運営していくことになっている。木曜カンファレンスは、木曜日の９時から１７時まで１日通し全ての時間において、小グループで語り合いながら自分の実践を捉え直しながら考え合ったりする時間が主である。午前１・２、午後１・２に時間が分かれているが、午前１以外はM２が主となってどういう内容にしていけば良いのか企画・運営を話し合っている。そのときに院生に必要なことをもとにテーマを設定し、考え話し合い、学び合う時間である主担企画、複雑な社会問題をテーマに作成・解答・評価というサイクルを繰り返し行う大学生版 PISA、子どもたちが探求したいと思える授業を単元通して各々作成していくという授業づくりの 3 つのグループに分かれてM２が企画している。去年まではM２が３つのグループに分かれて企画することはなかったが、今回M２の人数が多いこともあり新しい学びのあり方を追求している状態である。私は主担企画のグループに属しているが、グループで話し合う中でそれぞれの求めているものに近づけるにはどうしたら良いのかという課題にも直面している。しかし、自分たちが今日なにを話し合ってきたのかをグループを超えてクロスセッションなどを通して意見を共有し合う時間があることによって、気づかなかった視点に触れることができ、自分自身のファシリテーターとしても考え方としてもまだまだ未熟なことを感じる。未熟であることを実感することで終わらせず、この先どうこの学びの機会をつなげていくことが必要だとも実感している。M１、２がしっかり考えられるようにする一方で、これから先木曜カンファレンスで主として運営する立場でもあるが、自分の１年間の学びを同時併行してインターンでも木曜カンファレンスの運営においても振り返るのも忘れないでおきたい。

今年も、私の中では授業づくりが狭い視点を広げてくれる大切な機会でもある。体育の授業をつくっているが、身につけさせたい力を単元通して考え、子どもたちがどのような考えを膨らませることができるのか想像しながら考えるのは、とても難しい部分もあるがグループの院生、クロスセッションをした際の違うグループの院生から自分が気づいていなかった視点に気づくことができるのは、自分の学びを広げることができている。

始まって２か月、これからもどの機会においても学びの機会を見落とさず、自らどの場面であっても学び続けていきたいと思う。

2年目だから気付くこと

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

橋爪　志歩

教職大学院での学びも２年目に入り、今年は附属義務教育学校前期課程の２年生のクラスでインターンシップをさせていただいている。昨年とは学級も担任の先生も変わり、また新しい環境でのインターンシップがスタートした。

昨年は５年生のクラスでインターンシップを行っていたため、５年生の子どもたちと現在の２年生の子どもたちとでは、大きなギャップを感じる。４月にインターンシップが始まり、いざ２年生の子どもたちと会話をすると、自分の言葉足らずな部分を身にしみて痛感した。子どもたちにとってわかりやすい言葉で簡潔に伝えようとしても、なかなかいい言葉が浮かばずもどかしいような感覚になった。その感覚は、子どもに算数を教えていたときにも感じた。担任の先生から、A 君が算数のプリントの直しをするので見てやってほしいと頼まれ、休み時間に一緒に考えていた時だった。A 君は時計は読めるが、「〇時〇分から〇時〇分までの時間は？」となると、答えられなかった。その時初めて、今自分が大人になって当たり前のようにできていることを、子どもの思考が繋がりやすいような言葉で問いかけながら理解に繋げていくということに、今までにない難しさを感じた。結局、私が見ていたその A 君は、実際に時計を使って針を一緒に動かしてみても、５分ずつ声に出して刻んでみても、その時間で理解することはできなかった。４月の段階で、５年生とはまた違った難しさを感じていた。そのことを、週に一度ストレートマスターの院生が集まる木曜カンファレンスで話をした。同じグループにいた院生たちが、様々な手立てやアプローチの仕方について一緒になって考えてくれた。時間を考えるうえで、「そもそも時計は進むものであり、針が反時計回りで戻っていくことはないから難しい。」という言葉をきっかけに、シチュエーションや動機づけが必要ではないかという話になった。この単元では、子どもたちが時間を把握できるようになることで、見通しを持って生活ができるようになるということが、一つの目標だと考える。そうなると、子どもたちが生活に活かしていけるように、いかに日常生活と結び付けて教えられるかということが大切だと感じた。そして、この算数での出来事とカンファレンスを通して、発達に応じた教育をしていきたいと考えるようにもなった。そのために、自分には何が必要かを考えたとき、木曜カンファレンスでの学びがまた手掛かりとなった。

５月の木曜カンファレンスでは､インターンシップでの記録の在り方について改めて考え､「記録とは？」という入り口から、自分なりの記録を探るということを行った。1 年前の同じ時期に記録について考えたときには、「記録に残すことは好きで、記録はたまに読み返したときに変化がわかるもの」という程度にしか思っていなかったように感じる。しかし、1 年間かけてインターンシップで記録を取り､2 年目になって改めて記録について考えてみると､1 年目には見えていなかった記録の意義が見えてきた。私が考える記録を取る意義の一つとして、「分析する力をつける」という意味が新しく含まれた。私は 1 年間を振り返ると、記録を取り続けてきたことによって、それまで身についていなかった分析をする力が養われてきたように思う。「子どものこの言動には、どのような思いがあったのだろう」「先生のこの手立てにはどのような意図があったのだろう」と背景を探りながら記録に残し、自分にとっての課題を見つけるということをほとんど無意識にやってきていた。子どもの言動の場面を切り取っただけの記録では、何も残っていなかったように感じる。エピソードにして肉付けをして記録するからこそ、より多角的に子どもの言動の意味や背景を探ることができると考える。今後も、インターンシップ後の記録を大切にしながら、その場の表面だけで判断するのではなく、分析をしより豊かに発想できる力を磨いていきたい。

そして、２年生の子どもに対し、なぜその現状が起きているのかを考え、その発達に応じた支援ができるようになりたいと考えている。最終的には、記録を取ることで磨かれた力や見方を授業実践の中にも繋げていきたい。

省察的実践家としての教師への学び

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

桑原 寿々奈

大学４年間を兵庫県で過ごし、今年４月から地元福井で新たな生活が始まった。M１である私は教職大学院生として主に２つの新たなコミュニティに飛びこんだ。１つは、毎週木曜日にある院生と教職大学院の先生で構成される「木曜カンファレンスの場」である。２つ目は、週３回のインターンシップ先である福井大学付属義務教育学校前期課程校である。

インターシップが始まって３カ月、少しずつではあるが学校生活にも慣れてきた。私は現在、１年生のクラスでインターンシップを行っている。４月から継続的に子どもたちの様子を見てきて、学校という集団生活の中で少しずつ子どもたちの社会性が芽生えてきている様子が見られるようになっていると感じる。そのような子どもたちの成長の過程を一年間同じクラスで観察できるのは、長期インターンシップの良いところである。この３カ月のインターシップでは、メンターの先生の授業を見せて頂いたりや学級作りを学んだり、児童の観察を中心に行ってきた。授業中は参観だけでなく、勉強や身の回りのことで戸惑っている子どもに対して個別に支援したり、作業など一緒にやってみたりした。休み時間には、外で一緒に遊んだり教室にいる子たちに話しかけたりして、担任の先生よりもより子どもたちに近い存在として積極的にコミュニケーションを取り関わってきた。私にとって、これまでの３カ月は驚きの連続であった。私は、大学時代の教育実習は高校３年生のクラスで行った。つまり、今回のインターンシップで初めて小学生と関わることとなる。高校生では当たり前にできていたことが、小学生にとっては難しかったりできなかったりして、まだ幼児感が抜けない小学１年生との関りは毎日が新鮮であった。自分と子どもとの関りの中だけでなく、授業中の子どもの言動にもたびたび驚かされる。それは、１年生にとって出来ないことに対しての驚きではない。１年生の持つ豊かな想像力や考えへの驚きの方が大きかった。４月当初は１年生って出来ないことだらけだと感じていたが、３カ月経った今、子どもたち１人１人が持つ豊かな想像力と考えの可能性に目を向けている自分がいた。その視点から他の先生方の授業を参観するようになった。子どもたちの持っているものを引き出すことが上手い先生方の授業には一体感があり、子どもたちが生き生きしていると感じる。子どもたちの持つ可能性を信じ、授業を通して教師が引き出してあげることが大切なのだと学んだ。私は９月に授業を行うことが決まっている。授業そのものが教育実習以来で、尚且つ初めて小学生１年生に対して行うことに少なからず不安はある。しかし、自分も子どもたちの可能性を信じ、子どもと一体感のある授業を行ってみたいと期待をしている自分もいる。

そのような週３回のインターシップを支えている時間が、毎週木曜日に教職大学院で行われる木曜カンファレンスである。木曜カンファレンスは、「学びの振り返り」、「主担当企画」、「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」、「授業改革・カリキュラムマネジメント実践研究」で構成されている。学びの振り返りでは、学校で起こったことを他の院生や教職大学院の先生方にも共有して省察する時間がある。一方で、他の院生が持ち寄った出来事や悩みを自分に置き換えて省察できる時間でもある。学校現場で起こったことを、他の院生や教職大学院の先生方と多角的な視点から省察できる場や時間が確保されていることが、この教職大学院の醍醐味だと思う。主担当企画ではM2が考えたテーマについて語り合う。このテーマは院生室でも語られるようなテーマだが、あえて院生室よりも更にパブリックな空間で語り合いをする。その空間が、分かりやすく伝わる話し方を課題に掲げている私にとっては、話し方の良い訓練の場になっている。公教育会改革の課題に基づくプロジェクト学習では、班に分かれ協働して大学生版PISAを作成した。私の班は「尊厳死」をテーマにし作成した。作成し、他の院生に解いてもらい、そこで出た反省をもとにまた作成し直すといったサイクルを３サイクル行った。PISAをつくっているうちに自分たちも「尊厳死」について探求していて、探求による学びの深まりを実際に肌で感じることが出来た。授業改革・カリキュラムマネジメント実践研究では、各々が好きな単元・やりたい単元について単元スケッチを作成した。作成にあたって、他の人からアドバイスを聞く時間があり、それ

によって自分の単元スケッチがより深まっていった。さらに、この単元を通して子どもたちにどんな資質・能力が身につくか、その為にはどんな手法・手段が必要かという授業づくりの核心の部分について考えることが出来た。

このような木曜カンファレンスでの学びを、インターン先の実際の学校現場に戻って実践し、これからも省察的実践家としての教師への学びを深めていきたい。

5 月合同カンファレンス報告

サイクルを重ねて成長するということ

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市明新小学校　浅島 眞言

新年度がスタートして、早や 3 ヶ月。M2 として、この大学院の最高学年になったわけだが、昨年よりも自分自身の気づきを自覚できるようになったと感じる。

例えば、4 月の合同カンファレンスにおいては、育んでいくべき資質・能力とはなにか？また、「それはなぜか？」ということに着眼点をもち、サイクルを重ねることで文章から、それがどういったことか考えることができた自分に気が付いた。これは、昨年度にはあまり感じることができなかった感覚で、サイクルを通して成長することができたなと感じる。5 月の合同カンファレンスは、「それぞれの学校で動き始めた状況について」をテーマに語りを進めていった。私はインターンシップでの経験から、社会で通用する資質・能力の育成における教師の軸について話をした。

4 月の合同カンファレンスを受け、インターンシップで先生方が、子どもたちの資質・能力をどう伸ばしているかを疑問に思った。今年は、6 年生のあるクラスに配属させていただき、学んでいる。4 月当初から、資質・能力に関わって気になっていた文言に、「6 年生だから」というのがある。6 年生という学年は、1 年生から 5 年生を引っ張る責任のある立場である。でも、得手・不得手があるし、時には緩むこともある「人間」でもある。言い換えると、6 年生であるが故に、常に見本として行動しなければならない反面、人間としての欲求（サボったり、止めてしまったり）とが交錯している子どもたちが存在しているのではないかと捉えている。そういったことをも踏まえて、メンターの先生が子どもたちにどうアプローチしているかに着目した。

ある時、運動場で全校が集まる機会があった。私は、顔をあげて話を聞くことが 6 年生としての行動ではないかという反面、暑い中、集中し続けるのは無理があるという考えを持っていた。果たして、どんなアプローチをされるのだろうかと思いながら、集会が終わり、メンターの先生によって学年が集められた。すると、先生は「暑かったか？そんな暑くなかったよなあ。」と語り口調で入り、「目標をもって行動できたか？」という問いから「ダラダラするのは、目標がないからだ。」と言葉をかけられた。子どもに行動の内省をさせ、6 年生であることを自覚させる問いであったと考える。一方で、目標というのは子どもによって考え方は様々で、自己決定が許されている。それはつまり、「自分で考えて、自分で行動しなさい」という裏のメッセージが込められていたと思う。このことから、資質・能力の育成というのは、将来社会に出た時に、役立つ力。そのために、子どもたちの課題を捉えて、子どもたちが自ら考えていける（内省できる）ような適切なアプローチが求められると感じた。こう感じたものの、私には、どんな人間になって欲しいという軸の部分が構築できていない。こんな子になって欲しい。だから、こんな指導をというサイクルが建てられない。

といった話を同じグループになった先生に話した。すると、「経験だね。失敗しない事には、揺れる軸であり続けるよ」と話を頂いた。昨年は、この大学院を志願した理由である授業力向上をテーマにあげ、自分自身のスキルアップが主軸にあった。また、授業をしていく上で、どうすれば、集団を動かすことができるのかといった、まずは自分自身と向き合った 1 年間だった。今年は、子どもたちの現状を捉え、

どんな資質・能力を育んでいけば良いのだろうかと考えたり、先生方の軸を考えたりしながら、１年間の学びを種に、自分の軸を構成していきたいと考えた。

こうして、5 月のカンファレンスも早々に終わったわけだが、4 月というサイクルと 5 月のサイクルで、つながりを持って自分自身の考えが進歩していると思う。コツコツ積み上げるということが苦手な自分にとっては、ちょっとずつサイクルを通じて学ぶことができるようになってきたのかもしれない。また、この資質・能力について探究していくにあたっては、インターンという現場とカンファレンスという理論の場の往還についても、少しずつ意識することができているのかもしれない。

合同カンファレンス(5 月)レポート

学校改革マネジメントコース 2 年／奈良女子大学附属小学校　**西田　淳**

本カンファレンスの資料、一斉学力テストの中学３年生の国語Ｂの問題。１人の生徒がロボットについての自由研究発表を行う場面で、どのような質問をするかという問題に注目した。

今、私は学校で子どもたちに対して、「１つの答えを追い求めることだけでなく、多様な考えがあるという認識の中で、自分はどう考えるのかを根拠を持って説明できる力をつけることが大切です」と常に伝えている。しかし、私自身がこの問題を見て不安を感じてしまった。それは出題者の意図を裏読みしようとする意識がどこかに働いてしまうことが原因であった。「先に質問した２人に続いて」と出題されていることから、「同じ質問になってはいけないのだろう。しかもこの２人の質問とつなげて考えねばならないのか」などと考えてしまうのである。

後日、正解例はどのように公表されているのかが気になり調べてみると、発表者が例に挙げていた人型ロボットと動物型ロボットのうち、祖母にプレゼントしたいのはどちらなのかという内容のものだった。いたって単純な質問であり、「そんなことでいいのか」と思う反面、自分はその単純な視点を持てていなかった。今回、改めて自分の中に染みついている「1 つの答えを探そう」と考える「学習」や「テスト」に対する先入観のようなものを感じることになった。同時に、これからの教育において育成しようとしている力がどのようなものかについても再確認することができた。学校現場では、私のような「１つの答えを求める」教育観の中で育ってきた教師がたくさんいる。ほとんどがそうであろう。その教師の考えを転換させなければ、これから求められる「資質・能力」の育成は難しい。

セッションでは、２人の若手教諭とともに、それぞれの学校の様子や実践について交流を行った。

彼らが務める学校では、「教師がいかに効率よく教えるか」「いかにして教師に対して従順な子どもを育てるか」ということが教育の基本となっているようである。厳しく細かな校則で子どもを縛っているとも言っていた。

地域の抱える問題、家庭環境の問題など公立学校が抱える問題の大変さは自身も経験からよくわかっている。しかし、それらの問題が、規則で子どもを縛ることや、教師の言うとおりに動く「いい子」を育てることに重きを置いた教育の在り方で改善されないということも感じている。しかも、そのような教育の在り方で、これからの社会を創る「資質・能力」が育成されるとも思えない。根拠のある自分の考えを持ち、多様な考えを持った人と協働しながら新しいものを創造していく力を育てることが必要である。規則で縛るだけでは、子どもたちの豊かな発想力や想像力を自由に働かせる機会をも奪ってしまう。「先生の言うことだけを素直に聞いているのがよい」という考えの子どもを育ててしまってはいないか。もっと子どもたちの本来持っている力を信じ、生き生きと表出させ、伸ばしてやらねばならないのではないか。

そういう私も、若い頃に子どもを規則で縛ることを基本にした教育を考えていた。徐々にそのことの無意味さに気づき、悩み、考え続けた。そして「縛ることでは子どもたちの本来持っている力を伸ばせない」という答えを、本校の子どもの姿を通してやっと見つけることができた。子どもたちは教師が思っている以上の力を個々に持っている。

若い世代の教員には、自主研修の場に出向くことを勧めたい。他校の実践に学ぶことは多い。私も「国語の授業をどうしたらよいかわからない」という思いから、「国語教師竹の会」という研究会に参加するようになり、そのことが現在、附属小学校に勤めること、そしてこうして教職大学院で学ぶことにも繋がっている。「コミュニティ・オブ・プラクティス」では、有意義な実践的コミュニティのあり方と

して、強制的でなく自発的であることが挙げられていた。教師自身が自発的に学ぶことの意義に気づくことで、教師の強制ではなく、教師も共に学びをつくろうとする「子どもたちの主体的な学び」の創造へとつなげていきたい。

学校の協働を考える

学校改革マネジメントコース2年/福井県立福井東特別支援学校　岸野 美佳

今春、教育行政から７年ぶりに、学校現場に異動をした。大学院２年目の年の異動だったので、正直なところ、不安と焦りでいっぱいだった。そんな気持ちを引きずったまま臨んだ４月の月間合同カンファレンスでは、「途方に暮れています…」と泣き言を言っていたことを思い出す。目の前の仕事に追われ時間に追われ、見通せない中、大学の先生からいただいたアドバイスのおかげで、一筋の光が差した。そのアドバイスとは、以下のとおりであった。『今までは行政側から俯瞰的に見ていた学校に身を置くことになった今、管理職として学校の課題をどのように解決していくか。気がかりな子どもを担任が抱えがちである。教頭として異動したことを強みにしていく。担任、子どもを学校全体で支える組織が機能しているかどうか、丁寧にひも解いていくとよい』７年間勤務していた福井県特別支援教育センターでは、特別支援教育の指導主事として市町の小・中学校を中心に、教育相談、研修支援、就学支援、保護者支援に当たっていた。教育相談では、子どもが授業や学校生活で困っている姿を担任はどのように見立て支援しているのか、担任が学級内で抱えきれないときに校内で子どもや担任を支える支援体制があるのか、その中核となる特別支援教育コーディネーター（以下、特コ）は校内でどのような役割を担っているのか、管理職の後押しがあるのかなど、各校の校内支援体制やそのキーパーソンとなる特コ、管理職の役割について、把握するように努めてきた。今年度、教育行政から学校現場に異動し、上記のように前任で培った経験を生かしていけるのだろうか。

ここで、赴任した福井東特別支援学校の紹介をしたい。福井東特別支援学校は病弱特別支援学校で、本校（福井県立病院、福井県こども療育センターに隣接している）、五領分教室（福井大学医学部附属病院内）、月見分教室（福井赤十字病院内）があり、各医療機関と密接に連携を取りながら教育活動を行っている。本校は、病弱と肢体不自由を対象とし、県立病院に入院している子ども、こども療育センター内の医療型障害児入所施設に入所している子ども、地域の医療機関等で治療を受けながら自宅から通学している子どもが在籍している。全児童生徒 60 名中 23 名は重度・重複障害があり、さらに 14 名が医療的ケアを必要としている。60 名中 42 名は高等部生である。そのうちの 30 名の生徒は、精神疾患や発達障害の二次障害を抱えている。小・中学校時代に不登校経験を持つ生徒もいる。このように、本校の子どもたちは、一人一人の病態や症状、その程度が様々であるため、個々の教育的ニーズをいかに的確に把握し、一人一人に応じた教育を展開できるか、その専門性が求められていると思っている。

５月の月間合同カンファレンスでは、『学校の組織の現状とその課題を探る』テーマのもと、４月にいただいたアドバイスを受けて、本校における子どもを支える組織について、赴任してからの２ヶ月間でどのように見立てたのかを報告した。本校は、先にも述べたように、一人一人の病態や症状、その程度が様々であるため、自立活動を主に履修するコース、各教科等を合わせた指導と自立活動を履修するコース、小・中学校・高等学校に準ずる学科を履修するコースなど、５つの教育課程を持っている。このように子どもの状態像は幅が広く、多様な教育課程を実施して教育を行うことが本校の大きな特徴と言える。それに伴い、本校では障害別部会や障害別研究会といったように、日々の部会や授業研究についても主に３つのグループに分かれ、それぞれで行っている。この２ヶ月間で感じているのは、所属するグループ内で共有されたことをグループ間で報告し合うものの、報告で留まっているのではないという点である。つまり、グループ間の子どもの状態像が異なるという理由で、他グループの報告を自分のグループや担当する子どもと重ね合わせてとらえ直したり、自分事として他グループの取組を取り込んだりすることの難しさが本校の課題であると思う。大学の先生からも、協働するコミュニティが作りにくい難しさがあるとお話をいただいた。

連合教職大学院のクロスセッションでは、校種を越え、年代を越え、専門性を越えて話を聞き合い意

見を交わすことで、新しい視点が得られたり自身の実践を振り返ったりできる良さを実感しているところである。本校も、先生方がグループの垣根を越え、自身の経験や価値観を越えて、学校の同僚として子どものこと、授業のことをもっと語り合える組織を作っていけたらよいと考えているところである。それが子どもや担任を学校全体で支えていける組織として機能させていくことにつながるのではないかと思う。昨年度までは行政職という立場で学校を外から見ていた側であったが、今年度は学校マネジメントを実践する立場として、学校改革マネジメントコースの２年目の取組に挑戦していきたいと思っている。不安からのスタートであったが、それを受け入れてくれた月間カンファレンスを今後も活用して、実践をまとめていけたらよいと思う。

研究集会・公開研究会などの報告

富山市立堀川小学校　第８９回教育研究実践発表会

子どもの見取りを授業づくりに活かす

授業研究・教職専門性開発コース３年/福井市中藤小学校　佐藤　琢磨

先日、堀川小の公開研究会に行かせていただいた。堀川小には先生方や先輩方の勧めで、福井大学教職大学院に入学した年から行かせていただいており、研究会に参加させていただくのは今年で 3 回目になる。本ニュースレターでは、研究会での学びや気付きを述べさせていただきたい。

公開研究会で改めて学んだのは、子ども一人一人の見取りを授業に活かすことの大切さだ。私は授業をしているとどうしても、教科書の内容を教えようとするあまり、子どもの問いや関心を無視して授業を組み立て、進めていってしまう。堀川小の授業では、そのようなシーンはほとんどない。教師は子どもの思いをじっくりと聴き取り、「へぇ、そうなんだ」「○○さんはそう思ってるんだね」と返すだけである。

堀川小の授業の特徴は、個人学習に始まり、集団過程（話し合い）を通して深め合いながら、再び個人学習に戻り……と、個と集団の学習を巧みに組み合わせ、子ども一人一人の探究が深まっていく構成にある。話し合いの中では、よく見られる話型がない。「わたしはこう思ったのね」「うん」と、子どもたちの自然な言葉で授業が進んでいく。反論があれば遠慮なくし合う。小さな声でも、子どもたちはしっとりと聴き合っている。そのため、教師は「もう少し大きな声で発表しなさい」などと注意する必要がない。

今回参観させていただいた 3 年生の社会科の授業では、「堀川の道は語る」というテーマで、総合的な学習の時間と社会科の時間を組み合わせ、新学習指導要領に沿って探究が進められていた。子どもたちは堀川小学区内の道を歩き、「お気に入り」の道を中心にインタビューやフィールドワークを通じて、歴史や現状をそれぞれ調べていた。教室に入ると、子どもたちのレポートやポスター、お手製の地図やグラフなど、子どもが作成した資料で壁が埋め尽くされていた。

堀川小の公開研究会では、2 日間にわたって授業が公開される。同じクラスで、同じ教科の話し合いで公開される場合が多い。参観者もまた、同じクラスの授業を参観し、授業について理解するとともに、子どもの見取りを深めていく。

１日目の話し合いでは、「いなか」になっている現在の県道が、かつては「黄金通り」とも呼ばれた目抜き通りであったこと、そこに住んでいるお年寄りが寂しい思いをしている事実が明らかになった。

２日目の話し合いでは、今後自分たちが堀川という地域とどうかかわっていくのか、どうすればお年寄りも若者も、皆が幸せになれるのか意見が交わされた。

毎年驚かされるのは、授業後の検討会の深さである。一緒に参加させていただいた院生たちもその深さに驚いていた。堀川小の検討会では、子どもの個

人名を上げて検討会が進められていく。その子どもは何を考えていたのか、その考えに至った要因は何か、これまでの個人学習や、時には生活背景を遡って語り合う。そして、子どもの思いや意見に対する教師の支援を細かく分析していく。子どもの一つの意見について、何十分も協議が続く。

印象的だったのは、授業者の先生の語りだ。授業者の方は、堀川小に長く勤めておられるベテランの先生だった。それでも、検討会を受けて、自分の支援が「教え込みたい」という強い思いを受け、子どもの語りを遮ってしまったこと、子ども一人一人の思いを受け止めきれていなかったことを反省されていた。

公開研究会に至るまで、先生と子どもたちは題材と本気で向き合い、それぞれ学習を進めてきた。子どもたちは、話し合いの中でそれぞれの考えと出会い、調査や分析の視点が違うことを学び、手法を自分のものにしていった。それでもなお授業にも、子どもの見取りにも満足せず、検討会を通じてさらに子どもや題材に対する理解を深めようとする先生の姿勢に胸打たれた。私もこんな教師になりたいと心の底から思った。

私は公開研究会での学びを踏まえ、自分の授業づくりを大きく変えることにした。教職大では、大学院の講義やインターンシップの中で仲間や先生方と協働して授業をつくる機会がある。私は現在、小学校 3 年生の理科「こん虫を調べよう」の小単元の授業づくりに取り組み、実践をさせていただいている。これまでは「教科書にある定義や概念をどう伝えるか」ということを中心に考え、子どもの反応をなおざりにしてきた。堀川小の研究会を終え、私はまず、題材や授業に対する子どもの反応を書き出してみることにした。そして授業でも、子どもの意見を学習課題に据える努力をするようになった。例えば、子どもが昆虫を調べ、触覚を発見し「カブトムシには触覚があるのに、トンボには触覚がないように見えるから、昆虫ではないのではないか」という意見を提示し、子ども達が悩んだ時、次の時間はその意見を学習課題にするようにした。

堀川小の先生方は、「子ども一人一人の学びや思いは違う」という大前提に立ち、一人でも多くの子が主体的に学習に参加できるよう、日々考えておられる。堀川小の授業にはまだ遠く及ばないが、私も、一人一人の子どもの意見や思いを大切にして、授業を組み立てる努力をしていきたい。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

堀川小学校の授業研究を通して

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

日野 晶

6 月に入り、晴れ晴れとした金曜日と土曜日に富山県にある堀川小学校の教育研究実践発表会があった。私は昨年も参加し、当時は 6 年生の道徳「いじめに克つ」の授業と研究会に参加した。研究紀要のテーマは今年と同じ“個の学びと教育”であった。教職大学院に入りたての私にとってはじめての研究会は道徳の教科化目前ということもあったが、授業の参観者がとても多い印象だった。しかし、それ以上に子どもが話し合う様子がとても主体的で子どもが自分事として捉えて考えている様子が伺え、途中白熱した子どもたちの姿に鳥肌も立つほどだった。授業後の研究会も初参加であったので、どのように行われるのかドキドキした覚えがある。その研究会の際に先生方のご指摘の中に「〇〇さんを 2 日通して見ていたのですが、彼女はその中でこんな風に考えが変わっていき、こんな学びをしていたようで」といった意見があった。その時、私は『同じテーマを通していても 1 日、2 日でも子どもの中で考えが変わっていくのか、それはそうか。』と当たり前のことに気付かされた。そこで、昨年は土曜日しか参加しなかったことを後悔した。堀川小学校の教育研究実践発表会が 2 日に渡ってあるために「個の学び」が 2 日間通して観ることができる、増してはその後研究会で 2 日間通した「個の学び」について、授業者の

先生、助言者、参観していた様々な現場をこなしている先生方の意見を聞くことができることに気づいた。そこで今年は 2 日間同じクラスを見に行こうと決めて、今年度の教育研究実践発表会では 6 年生国語の「朗読『やまなし』」を参観することとした。「やまなし」に対する印象はとても“難しい”ことであった。読み解くことも難しい。なぜ、この単元は朗読をすることを目標としているのか、疑問を抱くものであった。

1 日目、教室に入り、子どもたちが自ら調べて考えをまとめていた掲示を見ていた。子どもなりに、それぞれ調べて考えたことをA4サイズの模造紙にまとめて掲示してあるのを朗読に向けて思いを持っているようだった。太宰治の出版当時の様子からやまなしの特徴を捉える子ども、文中に出てくる「クラムボン」を自分なりに考える子ども、「調べてみても作者の思いはわからん」と書いている子どもと様々ではあったが、自分の思いをもって学習に取り組んでいる様子が伺えた。1 日目はそのような子どもの思いを朗読に向けてどのように活かしていくのか発表し合うことから始まった。そこで子どものそれぞれの思いがその時間に一致するのはなかなか難しく見えた。2 日目ではそのうちの一人の思いにあった、「『やまなし』で家族のあたたかさを感じるのはどこだろう。」を学習目標としていた。この学習目標に沿って子どもたちは、それぞれ「やまなし」における家族のあたたかさを感じる表現を文中のセリフの表現からあげていった。そして、その学習目標を元に子ども同士で共有した後、自分で IC レコーダーを使い、朗読の練習をしていった。この授業の研究会で、他校の先生から「この学習目標が全ての子どもに響くものではなかったのではないか」というご指摘があった。たしかに、前日までは様々な思いの共有がされていた。そこで、私はある子ども（以下 A さん）が 2 日目の最後の振り返りで「朗読はセリフだけじゃないと思う。」と書いていたことを思い出した。A さんは 1 日目では「他の作品を調べて『やまなし』を考えていきたい。」と振り返りで書いていた。先ほどのご指摘にあったように今回の学習課題は A さんにとって初めから当てはまる学習課題ではなかったと思う。しかし、今回の授業で「『やまなし』で家族のあたたかさを感じるのはどこだろう。」という学習課題から A さんなりに学習課題を捉えて朗読をしていった際に、それまで出てきていたセリフ以外の文中から見つけたのだと思った。そう思うと、学習課題が必ずしも子どもの思いと完全に一致していなくても子どもは課題を新たに自分の思いと照らし合わせて考えることが可能だったのだと感じた。それは、A さんの中での思いの中心は「他の作品からやまなしを考えること」ではなく、「やまなしの朗読をより良く読めるように考えて、取り組んでいくこと」だったのではないかと思った。そう思うと今回の授業での学習課題も IC レコーダーでの朗読の練習をしたことも今回の A さんの学びには必要な過程であったと思った。子どもがそれまでの自分の思いと異なった学習課題であっても、目的をしっかり持った上で取り組んでいたからこそ自ら学び、進んでいくことができたのだと感じた。そこで 2 日間通して堀川小学校の授業研究会に参加したことで「自らの見方・考え方・感じ方・行い方を子どもたちが自分自身で再構築していく、個の成長を大切にする」教育観点を実際の授業で感じることができた。

「振り返り」学習の重要性

―堀川小学校の公開研究会より―

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市中藤小学校　**服部　哲也**

「堀川小学校はあの松本謙一先生（現在，金沢大学教授）が生活科の実践で基盤を作った有名な小学校だから，行くといいよ！勉強になる！」と小林和雄先生（福井大学准教授）から背中を押していただいたことをきっかけに，2 日間の堀川小学校公開研究会に参加することになった。松本謙一先生は私が昨年に受講していた教科生活基礎という科目で，生活科について教えていただいた先生である。当時の堀川小学校で松本先生が生活科を教えていた様子から，「子どもの願い」と「教師の思い」の一致により子どもが学んでいくのだと熱く指導をいただいた。そんなことがあり，堀川小学校の公開研究会

に参加させていただいたのである。私は2つの授業を見学させていただいた。

初日は，生活科2年生「つくってあそぶたこ」を参観させていただいた。1人の児童が「コレクションとして，もっと作りたい！」と発表したことに対して，「どうしてコレクションを増やすの？」「高くに飛ばさないの？」と質問して，1人の意見からそれぞれの意見を深めていく形式だった。他者の意見を踏まえて，自分の意見を述べたり，質問したりして考えていく。そして，活動に入っていく。活動では，たこを飛ばしに外に出ていく児童，コレクションを増やすためにたくさん作る児童，友達のたこを手伝う児童と様々だった。それぞれに価値や意味を見いだして活動していく。

「アクティブ・ラーニング」や「主体的で対話的で深い学び」と最近では様々な形で子どもの学んでいく姿について言われるようになったが，「まさにこれだ！」と私は感激した。特に驚いたことは，子ども自身が発表者に対して自ら意見や質問をしていく姿である。先生は子どもたちの意見をつなぎながら，学級の児童たちと同じ目線までしゃがみこんで児童の発表を見守っていた。子どもたちは発表者の方に向き，しっかり意見を聞く。そんな姿がとても主体的であると感じた。検討会では，授業者は「発表者が『たこのコレクションを作りたい』と言っているだけに思えたが，その子自身も『高く飛ばしたい』と思っていたみたいで，子どもが思っていたことに誤解があり，まだまだ子どもの意見を組み取ることができていなかった。」と反省していた。授業参観者から「子どもにどのような資質・能力をつけるつもりで授業を行いましたか？」という質問があったときに，生活科の学習指導要領で「分かる」という理解に関する項目についての議論が始まり，とても有意義な時間となった。

2日目は，社会科3年生「堀川の道は語る」を参観させていただいた。こちらも1人の児童の意見からそれぞれの意見を深めていく形式だった。そして，2年生から3年生に1学年上がっただけで，複数人の意見を踏まえた上での質問や意見が飛び交う。発達段階に合わせた学びがあるが，1学年上がるだけでも全く違う空間のように感じた。また，私は授業者の先生の動きにも注目した。発表者の児童の意見を聞きながら，常に学級全体の児童の様子をよく見ていた。児童の表情や態度から子どもが何を考えているのかを見取り，授業が発展していくようにデザインしていた。さらには「振り返り」もまた充実していた。「振り返り」をみんなが書いている際に，授業者が子ども1人1人に声をかけていた。「今日発表できなかったけど，こんなこと考えていたんだね！次の時間に発表しよう！」「〇〇さんとは違う意見を持ったんだ！いいね！」どの言葉も児童がかけられて嬉しい言葉で，児童も満足そうな顔をしていた。発表しやすい環境づくりがされている上，子どもたち自身の自己肯定感が上がるような声掛けをされていた。児童が書いた「振り返り」には必ず3人の意見を踏まえて，自分の意見や学んだことが書かれていた。

今回，堀川小学校の公開研究会で「授業の課題設定について」，「子どもの自己肯定感・発表しやすい環境づくりについて」，「振り返り」など様々なことを学ばせていただいた。特に「振り返り」学習については『【振り返り指導】の基礎知識』という本を小林和雄先生よりお勧めいただき読んでいたので，「振り返り」学習の重要性を改めて感じさせられた。福井大学の教職大学院は堀川小学校をモデルに作られたということを聞いたことがあったが，子どもたちの主体的で対話的に学んでいる姿を見ると，私たち教職大学院生に通じているものがあるように感じられた。そして，私たち教職大学院生は「省察」という言葉をよく使うが，今回の堀川小学校での「深い振り返り」の活動と一致するように思えた。他者から聞いた意見をもとに自分の意見を考え，他人と再び話し合い，振り返っていく…。まさに省察である。私も堀川小学校のように子ども1人1人の思いや考えを大切にこれからのインターンに取り組んでいきたい。

夜には，金沢大学教授の松本謙一先生主催の「語ろう会」があり，私も参加させていただいた。松本先生が堀川小学校にいた時代の教え子，全国のいろんな大学から教職大学院生や先生方が集まり，それぞれの悩みや苦労していること，今回の堀川小学校の公開研究会でのことについてお話をした。教職大学院にも学び方が様々であった。「語ろう会」では先生方がそれぞれ話し合い，学ぼうとしていた。この話し合いもまた自分の実践や経験を踏まえた上での「省察の場」になっているように感じた。私はこのようなコミュニティを大切にしてこれからも学び続けたい。

個と集団で授業をするということは

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属特別支援学校　吉田　和菜

堀川小学校の研究会に参加したのは、今年が初めてである。堀川小学校は金曜・土曜と 2 日間を通して研究会を開く。そのような研究会は初めてで新鮮であった。私は、各日別のクラスの授業を見たのだが、2 日目の授業検討会では、昨日の課題を踏まえた授業が求められており、堀川小学校の先生方の授業をどんどん良くしていくという姿勢に感奮した。

朝堀川小学校につくと、ヤギを飼っているクラスの子どもたちが「ヤギいるよー！」と案内してくれる。また 2 日目に見たクラスの朝に行う「くらしの時間」では、「研究会でお客さんがたくさんいて緊張するけどがんばります」と発表する子がいることから、これまでの学習の成果を参観者に見てほしいという思いがうかがえる。私が、小学生のときには指導主事訪問などで参観者の方が来ても何も心動くことはなかった。堀川小学校では、「私たちが主人公だ」と児童自身が感じているのだろう。そこから堀川小学校の魅力が伺え、そんな児童たちはどのような授業を展開していくのか期待が膨らんだ。

1 日目には、特別支援学級で国語科の授業を見た。落語の発表会に向けて落語の稽古をするという活動だった。児童 4 人のクラスで、一人ひとりが「扇子の使い方を変えたい」「登場人物によって声色を変えたい」などのめあてを設定し、そのめあてに向かって稽古を行っていた。授業の最後の発表会では、そのめあてによって児童同士で感想や助言を行っていた。言葉をたくさん持っている児童 A 君が「僕は～を間違えてしまった。まだレベル３だ」としょんぼりする。先生が「レベルって何？」と聞くと、A 君は「レベル１は～で、レベル２は～で…○○さんはレベル５だと思う」と説明する。すると、「レベル」という言葉を他の児童も使い始め、「僕はレベル１万」などと言い始める様子があった。一人の子の発言が、皆に広がって周りの子が言葉を獲得していく。しかし、これは教師が A 君の「レベル」とは何かを聞かなければ、他の児童は何か分からないままであっただろう。授業の場面では、児童の発言をつなげていくことを丁寧にされていた。私はインターン先で関係性の中で子どもたちを見ることができていないという課題があるが、この授業を見させていただいて貴重なヒントを得たと感じている。

2 日目には、3 年生の社会科「堀川の道は語る」を参観した。道という題材から、町の社会的変化や、人々の思いなどを学習していくという活動である。授業が始まると、児童たちが「道への思い」を発表していく。

B 君は「小さな店どんどん無くなり桜橋通りは賑わいがなくなった。僕は市電に乗って小さな店を復活させたい。」と言う。だが、C さんが B 君の話に勘違いして、「小さな店に行くのは、お年寄りに任せている。自分はしないの？」と質問する。それに対して B 君は「僕は行かないけど、お母さんと行こうと思っている。」と答える。そして、教師が C さんはどう考えているかを聞くと、C さんは「桜橋通りはにぎわいがなくなってる。個人の（小さい）店に行ってもらえるようにポスターを作る。だから、B 君はやらないのかなって思った。」と言う。B 君は、市電の路線図が変化していることを皆に伝え、教師からの「どうしていきたい？」という質問に「ポスターにして、分かりやすく皆に伝えたい。」と言う。授業が展開していくと、「ポスターを作る」という子に対して、普段から一般論で述べる子が「ポスターで変わる？」と質問すると、思いで返してくる。質問した子は戸惑いを見せる場面があった。このように、認識のずれが授業の中で出てきた。

授業検討会では参観者から児童の認識がずれているときに流れてしまうことがあったが、そこを周りの児童にも広めていくといいのではという意見や、教師が児童を困らせたくないと思って話の流れを止めてしまうと深まるのかなどという意見があった。また、教室にざわざわが起きず、ついていけない児童がいたことから、発言していない子にとってしたかった話だったのかという意見があった。私は、授業を見る際の視点が分からず、一人の子を追っかけて見るということをしていたが、検討会の話を聞くことで全体の流れと児童一人ひとりの思考が交差しているのかという視点も大事だと気づかされた。私の一人追いかけて見た生徒も発言はなく、発見やつまずきがどこなのかもわからなかった。全体と個をどちらも見ていくということはどういうことなのか、どのように見ていけるのかを考えていきたい。

２クラスの授業を見た上で気づいたことがある。それは、子ども一人ひとりの思いを大事にすることが大切であるということである。従来の授業では答えが一つであったが、児童の授業における目標や気づきはバラバラである。しかし、そのバラバラが学

習を深めていくために必要なことだと感じた。特別支援学級の落語では、一人ひとりめあてが違うものの、他の人のめあてに感化されている様子が見られた。無理にクラスで一つの方法・答えに導き出すのではなく、集団の中で一人ひとりの思考の道を豊かにしていくことを意識した授業を大切にしていきたい。

堀川小学校で嬉々と学習する児童たち、日々子どもを大事にされて授業研究されている先生方、検討会で児童の姿から学習をよりよくするにはどうすればよいのかを話されていた参観者の方から授業づくりにおける大切な要素を垣間見れる貴重な機会だった。

平成３０年度 教員免許状更新講習－県と大学との協働２年目－

教員免許更新制は教育職員免許法第9条の3に基づき，平成２１年４月に始まり、全国の大学等で教員免許状更新講習として開設されました。今年度で10年目を迎えますが、10年に一度巡ってくる講習ですので、ちょうど１サイクルを終えることになります。

本学におきましても，受講者の先生方に満足いただけるよう，毎年度いずれの分野・領域でも，創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきております。特に，これまで必修領域（教育実践と教育改革I）を担当する本教職大学院では，開設当初から「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ ―実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る―」をキーコンセプトに，専門職として探究し合う新しい方法を採り入れた講習を実施してまいりました。

プログラムの特色としては，これまでの本学教職大学院のスタイルを引き継ぎ，次のようになっております。

教職大学院の教師教育のノウハウを生かして，「実践・省察」を重視した講習にしていること

少人数による話し合いを基本とし，そのグループ構成は講習，年齢，地域，教科等の枠組みを解いたものにしていること

必修領域6時間に，選択必修領域である「教育実践と教育改革Ⅱ」の6時間，
選択領域である「教育実践と教育改革Ⅲ」6時間を加えて，連続3日間の計18時間で一括りとする講習を提供していること

ここ数年来、現代社会は「知識基盤社会」「少子高齢化と人口減少」「ＡＴ・情報ネットワークの推進した社会」「貧困化」「グローバル化」「ダイバシティ化した社会」といった課題が顕著になり、現在の子どもたちの活躍する10～20年後の近未来すら予測することが困難な社会であると言われています。こうした社会を生き抜くには、主体的に、他者と協働しながら多様、多角的視点をもち深く考えながら、課題に取り組んでいく資質・能力を培うことが大切であると言われていますが、まずは、その子どもたちの教育にあたる教員こそが、その資質・能力の向上を図ることが肝要となります。

本プログラムは、そうした教員の資質・能力を向上し、学び続ける教員を生涯支えることを目的に設計されました。

１日目は，受講者が自らの教育実践をまとめたレポートの報告から始まります。実践の経験を交流し課題意識を共有するため，グループのメンバーで語り合い・聴き合いを行います。その後，国の施策や世界の動向，子どもの発達についての最新知見を学び，午後からはグループ内で，今後の実践に向けての展望を考えながら，優れた実践事例資料を読み深めていきます。２日目は，年代別に３コース（「授業づくり」「子どもの発達支援」「組織的な学校づくり」）に分かれ，国の動向や学校を巡る近年の変化や気がかりな子どもへの対応を学びつつ，テーマと関連する優れた実践事例を１つ取り上げて考察し各自レポートにまとめます。その後，コース・年代・校種を交えた新たなメンバーで構成されるクロセッション（報告会）を行います。３日目は，教師としての自分の歩みを振り返り今後の展望を拓く目的で，２日目のレポートに自身の教育実践を加筆したものを完成させ，クロスセッションで報告しながら省察を深めるという流れになっています。

こうした講習を続けるうち、できるだけ多くの先生方にこの学びを広げていきたいという思いが　教職大学院だけでなく、県教委としても強くなり、また、働き方改革として教員の負担を減らすということもあって、昨年度からは，福井県教育委員会との共催となり，福井県教育総合研究所が行う中堅教諭等資質向上研修8日間のうち３日間を本講習と兼ねることになりました。

県教委との共催として本講習が悉皆の研修となったことで、これまで一部の方の受講にとどまっていた本教職大学院の講習内容を県内の国公立の学校、幼稚園の教員の方々全員に受けていただけるようになったことは、大学としては誠に喜

ばしいことと感じております。また、受講者の皆様にとっても、これまで必修講習、選択必修講習、選択講習とそれぞれに受講料を支払っていただいておりましたが、それが全額無料となり、しかも３日間、１２時間分の受講を福井県教育総合研究所で一度に申し込みができるようになり、手続きが簡便になったことも大きいのではないかと思います。

昨年度から講習の中心として世代ごとに設定されたテーマ「授業づくり」「気がかりな子への支援」「チーム学校」を追求する構成となりました。さらに今年度は「チーム学校」を「学校マネジメント」として、学校の様々な活動をみんなの課題とし、協働で取り組むファシリテーションの視点を取り入れ、さらにそのファシリテーションの視点を授業づくりにも生かしていくことになりました。

今後も，事後評価アンケート等から受講者のニーズや要望をしっかり受け止めながら，実際の教育現場で大いに活かせるような一層充実した講習にするため，さらに適切な内容吟味，丁寧な運営を心がけていきたいと考えております。

講習の詳細については，以下のとおりです。

対象の職種　**福井県採用の教員で，現在国公立の学校に勤務する者**

（教諭，実習助手，寄宿舎指導員，栄養教諭，学校栄養職員，養護教諭）

講　習　名　**教育実践と教育改革Ⅰ（教育の最新事情①）・・・・・必修講習部分（ 1日間 ）**

教育実践と教育改革Ⅱ（教育の最新事情②）・・・・・選択必修講習部分（ 1日間 ）

教育実践と教育改革Ⅲ（教育の最新事情③）・・・・・選択講習部分（ 1日間 ）

日程・会場　**①平成30年 7月23日（月） 7月24日（火） 7月25日（水）　３日間とも福井県教育総合研究所**

②平成30年 8月 7日（火） 8月 8日（水） 8月9日（木）　３日間とも福井県教育総合研究所

③平成30年 8月15日（水） 8月16日（木） 8月17日（金）　３日間とも嶺南教育事務所

④平成30年 8月22日（水） 8月23日（木） 8月24日（金）　３日間とも福井県教育総合研究所

⑤平成30年12月25日（火）12月26日（水）12月27日（）　３日間とも福井県教育総合研究所

※受講エントリーは６月１日県教育総合研究所ホームページからお願いします。（小杉　真一郎）

福井大学 連合教職大学院 夏期説明会

平成30年

8月4日（土）13:00～

13:00からの全体説明のあと、概ね14:00から個別相談となります。

福井大学文京キャンパス
アカデミーホール 集会室

過去問が閲覧できます！
募集要項が入手できます！

教職開発専攻

授業研究・教職専門性開発コース
ミドルリーダー養成コース
学校改革マネジメントコース

平成31年度第1回　学生募集日程

出願期間：11月　2日（金）～11月　8日（木）
試験日　：11月24日（土）
合格発表：12月　4日（火）

小学校教員免許取得プログラム

長期インターンシップを活かし、3年間で必要単位を取得すれば、小学校教諭1種免許状が取得できます。
課程を修了すると、小学校1種免許状が専修免許になります。
授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割納入することになります。

（注）教職大学院では、中学校等の教育職員免許状を取得していることを前提としています。
（条件については、事前にお問い合わせ下さい。）

出願を考えている方、関心のある方は、お気軽に以下へご連絡ください。

福井大学学務部入試課
TEL：0776-27-9927　E-mail：g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp
※氏名・電話番号・所属、志望専攻およびコースをお知らせ下さい。

創造力、実践力。
国立大学法人 福井大学 UNIVERSITY OF FUKUI

【 編集後記 】

夏期集中講座のサイクルに合わせて、ある子どもさんとの８年分の係わりの記録を読み返しています。今、わかった！と新鮮な思いで書いたことは、実は何年も前にも書いている…ただ、その深さが変化する。そういうことを８年分の記録は示しています。院生のみなさんと同じように自分を問い返す時間を大切にしたいと思います。

発行が遅れましたこと重ねてお詫び申し上げます。（A）

教職大学院 Newsletter　No.113
2018.8.16　内報版発行
2018.8.31　公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1